

小・中学校教諭がスクールソーシャルワーカーの存在価値を認めるプロセス

○ 港区児童相談所 増田 奈苗 (010271)

キーワード3つ：スクールソーシャルワーカー プロセス 協働

1. 研究目的

近年、学齢期の子どもの抱える課題は、より複雑化・困難化しており、福祉的なニーズも多い。専門職・多機関が協働し、包括的な支援体制を構築することが求められており、教員とスクールソーシャルワーカー（以下 SSWer と表記）の協働についても、重要なテーマであると考えられる。

他職種が協働し支援体制を構築するには、互いの職務や専門性への理解が必要である。では、教員は SSWer に対し、どのように理解を深め、存在価値を認めていくのであろうか。そのプロセスを明らかにすることは、学齢期の児童支援に関わるソーシャルワーカーにとって学校や教員の視点を理解することができる有効な研究となり、今後の学校との効果的な協働を促進することが期待できる。

そこで、本研究は、「小・中学校教諭がスクールソーシャルワーカーの存在価値を認めるプロセス」を明らかにすることを目的とする。

2. 研究の視点および方法

調査対象の B 県 A 市の全小中学校には、教育相談体制のキーパーソンとして、校内外のコーディネート機能をもつ「児童支援専任教諭・生徒指導専任教諭」（以下専任教諭と表記）が配置されている。校内で SSWer との連携の中心にも位置付けられている。

A 市の SSW 活用事業については、2011 年に要請派遣型で開始し、事業拡大に伴い 2018 年度から 2020 年度の 2 年間に於いて、巡回型を目指したモデル事業が行われた。

本研究では、その 2 年間で A 市のモデル事業実施校にて SSWer と関わった専任教諭 10 名に対して「専任教諭と SSWer の協働」を主テーマとして、個別インタビューによる半構造化面接を実施した。インタビュー内容は録音し、逐語録を作成した。

分析方法は、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下 M-GTA）を用いた。分析テーマを「専任教諭が SSWer の存在価値を認めるプロセス」、分析焦点者を「SSWer 担当校の専任教諭」と設定した。ヴァリエーションと定義に基づいて概念を生成した後、概念同士の類似性や対極性に基づいてサブカテゴリー及びカテゴリーを生成、カテゴリー相互の関係から分析結果をまとめ、その概要を文章化し結果図を作成した。

3. 倫理的配慮

調査協力者には文書および口頭により、研究目的、調査の趣旨、データの扱いなどの

研究倫理について説明し、同意書に署名を得てインタビューを実施した。また、武蔵野大学大学院通信教育部人間科学研究科の倫理委員会の承認を得て開始した（承認番号 20-04）。なお、本演題に関連して、開示すべき利益相反（COI）状態はない。

4. 研究結果

M-GTA の分析結果から 43 の概念と 11 のサブカテゴリーが生成された。サブカテゴリーから、【敷居が高い】【仲間に入れてあげようかなあ】【この人だれ？じゃなくなる】【学校とか子どもとかを良くしていきたい】という 4 つのカテゴリーが生成された。以下にストーリーラインを記す。

専任教諭は《学んでいる誇り》《担任へのリスペクト》を自身の【専門性の軸】として、【学校とか子どもとかを良くしていきたい】という目的に向かい【管理職の支持的トップダウン】のサポートの下で業務を行っている。

専任教諭は、福祉的支援や他職種に対しての期待や戸惑いだけでなく、学校の役割には《線引きは当然ある》という意識や《自分から相談することの壁》を持っており、SSWer に対して《敷居が高い》と感じている。SSWer との関わりの中で《心地よくて、話してて》と、SSWer が尊重してくれたと感じる経験や相談することへの安心感を持つ経験、《塩梅上手》な役割分担を経験することで【仲間に入れてあげようかなあ】と認め始める。専任教諭は、過程の中で SSWer の思考、専門性、言葉、姿勢に対して、自身の《学んでいる誇り》《担任へのリスペクト》という【専門性の軸】と重なるか、そして、SSWer という人と【学校とか子どもとかを良くしていきたい】という思いの共通認識ができるか、ということへ立ち返り、重なりを探りながら進む。この行き来を繰り返しながら（一緒に動いて知った新しい感覚！）（手も足も出ない、が出せた）という体験を積み、《やりながらわかる》経験が蓄積され、【この人だれ？じゃなくなる】《味方ポジション》という存在になる。専任教諭は、（たのしかったよね）（じぶんでできたよ）という達成感を味わい、SSWer の存在価値を認めていく、というプロセスが明らかになった。

また、このプロセスの一連の流れは、専任教諭自身の【専門性の軸】が盤石になり、その結果【学校とか子どもとかを良くしていきたい】への強化が期待できるサイクルになっている、ということも示されている。

5. 考察

教員が大切に思う学校領域への誇り、担任・児童との関係性、相談に対する躊躇や戸惑いといった言語化されない感情というものが、SSWer の存在価値を認めるプロセスにおいては重要な要素である。学校と関わるソーシャルワーカーが、要素を含めたこのプロセスを理解し活用することで、学校との関係をより良いものにする後押しができるのではないか。本研究が協働促進の一助となり、児童支援の発展につながることを期待したい。